

70歳大学生 被災者支援

サークル設立 故郷・気仙沼の仮設訪問

東日本大震災で津波にのまれながら命をとりとめた70歳の大学生、東京福祉大社会福祉学部4年の太田初子さん(群馬県伊勢崎市)が、故郷の宮城県気仙沼市で被災者支援を続けている。17日には、孫世代の学生たちと共に被災者にかき氷と笑顔を届けた。



「今年も来たよ」。17日午前、約200人が暮らす気仙沼市立面瀬中学校の仮設住宅で、太田さんを始め学生ら8人は、イチゴ味のかき氷を作り始めた。天気は曇りで連日の暑さは和らいたが、2時間で約1000人分を振る舞った。太田さんは、外出できない高齢者宅3か所も訪問し、「元気で声かけ、かき氷を配った。太田さんは中学卒業後、群馬県大泉町で就職し、26歳から同県伊勢崎市で暮らした。62歳で夫を亡くす。父の看病もあり帰郷。63歳で気仙沼高定時制に入学し、高校で学ぶ夢をかなえた。

震災は高校3年の時だった。逃げる途中に津波に襲われたが、市職員に助けられた。妹夫婦が亡くなり、仮設住宅の子供にかき氷を手渡す太田さん(左)と17日、宮城県気仙沼市で。

かき氷には忘れられない思い出がある。仮設住宅にいた11年夏、佐賀県から被災者支援に来た4人家族がかき氷を振る舞ってくれた。「仮設は暑くて何もないから、本当にうれしかった」。他の被災者たちも涙を流して喜んだ。

太田さんと小中学校が一緒だった仮設住宅の自治会長(左)の尾形修也さん(70)は「自らも被災したのに気仙沼まで足を運んでくれて本

当にありがたい。交流を楽しみにしている人も多い」と話す。

太田さんは「傾聴の技術を磨き、一人でも多くの方が前向きに生きていけるよう支えたい」と、精神保健福祉士の国家資格取得を目指す。来年も必ず来るよ。古希の大学生は、故郷の被災者たちに約束した。